目白大学　心理学研究
第９号　2013年　１－12

原著

東日本大震災被災後約２ヶ月時点に実践された『俳句・連句作り』の学校プログラムに見られる中学生の心理的様相

―KJ法による中１生の俳句作品の質的検討から―

目白大学人間学部　黒沢　幸子
目白大学大学院心理学研究科　西野　明樹

【要　約】

2011年３月11日，東北地方で東日本大震災が発生した。未曾有の津波被害と甚大な物理的・心的打撃を受けた被災地への様々な緊急支援は，一定の成果を得た。しかし，中・長期的支援において重視されるべきは，現地の自律的な復興・再生である。そこで本研究は，自助的な学校プログラムとして被災地Ａ中学校で実施された，『俳句・連句作り』に着目した。本稿で報告しているのは，2011年５月（震災後約２ヶ月）時点に詠まれた中学１年生達の句を，KJ法によって体系的にまとめた結果である。その結果は，生徒達の複雑な心理的様相と同時に，彼らの抱く愛郷心及び復興への強い思いを明らかにしている。“復興”は，一種の象徴的希望として，子ども達自身を励ましていた。さらに，『俳句・連句作り』の応用可能性として，生徒達の句が教員や周囲の大人達を鼓舞し，地域コミュニティまでも奮起させ得ることが示唆された。

キーワード：東日本大震災，学校プログラム，俳句

問題意識と背景

１　東日本大震災被災下の学校心理臨床活動の展開と課題

2011年３月11日に発生した東日本大震災は，津波によって東北地方沿岸部に甚大な被害をもたらした。被災者達が多大な物理的・心理的打撃を受けたことは，すでに周知の事実である。様々な支援が被災地に向けられる中，臨床心理学分野においては，日常的な生活支援を第一層とした多層的な支援モデルと中・長期的な支援計画の下，現地の自律的な復興，再生に向けた心理社会的支援が今も模索の中で進められている（三浦，2012）。

甚大な災害によって人々が一時的に示す災害トラウマ反応は，生命の危機に曝された人が見せる極めて正常な生命維持反応であり，多くの人々は数日から数週間で回復する（飛鳥井，2011）。しかし，生活体験が少なく，発達の途上にある子どもたちについては，その精神的健康へのネガティヴな影響が懸念される（伊藤・佐藤，2011）。そこで東日本大震災下では，日本各地の臨床心理士等が派遣スクールカウンセラーとして被災地各校に緊急派遣された。このような派遣事業は，必要数の専門家を確保し難い現地の状況を鑑みた緊急支援として，価値あるものと考えられる。しかし，遠隔他県から派遣された者は，一定期間の任期終了後，生活基盤のある地域に戻る。したがって，中・長期的な支援に不可欠な支援の継続性確保のためには，新たな支援形態が必要となる。

コミュニティ支援への着目　そこで有力な視点を与えるのが，現地にすでにある様々な人的・社会的資源を掘り起こして活用する，コミュニティ心理学的視座である。さらにその中で

も，低コストで治療的なソーシャルサポートを提供し得るものとして，セルフヘルプ・グループが挙げられる（Scileppi, Teed, & Torres, 2000　植村訳　2005）。セルフヘルプ・グループとは，類似の困難さを経験している者同士で行われる自助的な取り組みである。したがって，地震のような地域全体が類似の被害を受ける災害下では，地域・学校コミュニティ自体が大きなセルフヘルプ・グループとしての機能を果たすことが予測される。

実際に飛鳥井（2011）も，困難な状況の中で互いに支え合い，気持ちを分かち合うことが，広く被災者のメンタルヘルス対策に役立つことを指摘し，コミュニティの果たす機能の重要性を示唆している。また，心のケアにおいては，他者が被災者の心をケアするよりも，被災者自身が傷ついた心を自ら主体的にケアできるようにサポートすることの方がより本質的である（冨永，2012）。これらのことから，地域・学校コミュニティの自助的なソーシャルサポートを醸成し得る取り組みへの着目は意義深いものと考えられる。

２　東日本大震災被災校で実践された自助的な表現活動への取り組み

ここで，東日本大震災による重大な津波被害を受けた被災地域（宮城県牡鹿郡女川町）にあるＡ中学校で行われた，自助的な表現活動に注目したい。Ａ中学校で実践された『俳句・連句作り（以下，本プログラムとする）』は，日本宇宙フォーラム（JSF）の「地球人の心ぷろじぇくと」を援用して実施された取り組みである。

筆頭筆者は，Ａ中学校で本プログラムが実施される以前より，「地球人の心ぷろじぇくと」についてJSFから協力依頼を受け，その学校プログラムの開発・実施に関して心理学的観点からの助言・協力を行っていた。その一連の協力関係の下，Ａ中学校での実践についてJSFから報告を受けるとともに，被災地で実施される学校プログラムの意義や留意点に関しても，専門的な観点からの助言・協力の要請をすることとなった。2011年８月及び９月には，JSFとともに現地を訪れ，本プログラムの展開について教育関係者との意見交換を行った。

「地球人の心ぷろじぇくと」とは　「地球人の心ぷろじぇくと」は，東日本大震災の発生以前に，JSFによって立ち上げられた学校を主な対象とした会員制教育活動であり，その前身は宇宙航空研究開発機構（2008）による国際宇宙ステーション「きぼう」（ISS）の文化・教育利用としての「宇宙連詩」の取り組みである（「連詩」とは，複数の人々によって，前者の詩に自分の詩を付けてつないでいく詩の共同制作。日本古来の連歌・連句形式を母体とする）。子ども達の詩・絵・写真等を収録したDVDディスクをロケットで打ち上げてISSに保管することで，子どもから宇宙とのつながり感や地球人としての意識を引き出すことを活動目的としている（JSF，2011）。

被災地Ａ中学校における取り組みの概要（2012年８月末時点まで）　東日本大震災発生後，「地球人の心ぷろじぇくと」の呼び掛けにより，Ａ中学校生徒２名（被災当時，中学３年生）によって描かれた被災前及び被災直後の女川の風景画が，ISSに打ち上げる作品として提供された。これを契機に，JSFと地元教育委員会，Ａ中学校管理職・教員等との間で話し合いが持たれ，その後，独自の学校プログラムとして本プログラムが学校現場に導入されていった。

Ａ中学校で初めて本プログラムが実施されたのは，2011年５月（被災から約２ヶ月後）であった。実施時にはJSF職員が臨時講師となり，全校生徒の前で導入の契機となった２枚の女川の絵を提示し，プログラム概要について説明を行った。説明された内容の要点は，(a)作品をデータ化して，地上から星として目視可能なISSに打ち上げること，(b)Ａ中学校生徒が詠んだ句（五・七・五）を全国の他の学校に届けて下の句（七・七）を各学校の生徒につけてもらうこと，(c)全国各地で詠まれた下の句を携えて，もう一度職員が同校にやってくることの３つである（山中，2012）。「俳句・連句」（五七五・七七）形式は，子ども達が表現しやすく，つながりを作れるものとして，「宇宙連詩」の経験から選択された。

実際の句作りは，自身も被災し多くを喪失した国語科教員の主導によって，各クラスの国語科授業内で順次行われた。使用した器材はA4

コピー用紙を縦に切った短冊と鉛筆等の筆記用具で，いずれも現地で調達された。句作りの直前には，教員が震災前の女川の風景を写した十枚弱の写真を次々と黒板に貼った後に，改めて卒業生の描いた２枚の絵を提示し，「みんなも言いたいことがあるよな。今の気持ちを俳句にしよう」と，句作りを促した。

その後Ａ中学校では，2011年11月，2012年１月，2012年５月に，『俳句・連句作り』が行われている。これら計４回の実践とも，JSF職員が臨時講師として授業に参与している。JSF職員が訪校してのプログラム実践は単発的であったが，教員のアイディアによる国語科授業以外での句作り，保護者や地域への作品紹介，生徒達による自然発生的な句作り等は継続的に行われている。このように，Ａ中学校で実施された『俳句・連句作り』は，JSFの企画に留まらない独自の取り組みへと発展していった。

３　心理的ケア活動としての言葉作り

成長につながる表現活動　被災者（児）への心のケアにおいて重要とされる活動に，被災体験の表現活動がある。しかし，安全・安心・リラックスといった体験を経ない段階や場で行われた場合には，二次被害を招きかねない。そのため，被災体験をリスク要因から成長のためのパワー要因に変え得る，適切な表現活動を行うことが肝要となる（冨永，2012）。そこで冨永（2012）は，学校コミュニティにおける適切な表現活動として，子ども達が日常的に取り組んでいる作文等を活用した自然な表現活動の展開を提案している。

臨床心理的援助における句作り　軽便で日本人の肌に合い，安全性と保護性を持つ言葉作りの一形態に，俳句がある（星野，1998）。臨床心理分野において句作りは，その心理的ケアへの貢献から，“俳句・連句療法”とも呼ばれる（飯森，1990）。慢性統合失調症患者の日常的ケアとして俳句療法の意義を指摘している飯森（1990）によれば，俳句や連句の持つ制度化された枠組みは，内的世界の表出を安全に行うことを可能にする。また俳句は，“想像上の聴き手”に向かって語りかける機能を持っており，情動の発露やカタルシス，ひいては，現実の他者に対する“生のコミュニケーション”への希求を満たし得る，優れた言語表現の形態としても捉えられる（飯森，1990）。

しかし，災害による心的外傷や喪失を体験した人々が句作りを行うことの心理的効果は，国内外の主要な学術雑誌いずれの報告にも見られない。

本研究の目的

本研究では，継続的に多様な展開を見せているＡ中学校の取り組みの中でも，2011年５月（被災後約２ヶ月時点）に実施された俳句作りに着目する。そこで，臨床心理学的見地からの質的検討によって句を体系的に整理し，そこからうかがわれる生徒達の心理的様相について探索的理解を試みる。これらを通して，甚大な自然災害を経験した子ども達に対して学校コミュニティが主体となって行った自助的な心理的ケア活動から，『俳句・連句作り』の応用可能性に示唆を得ることを目的とする。

方法

１　予備調査

本研究では，Ａ中学校生徒の心理的ケア・成長に対する本プログラムの貢献について示唆を得るため，Ａ中学校国語科教員１名，JSF職員１名，Ａ中学校以外で「地球人の心ぷろじぇくと」の会員である学校に勤務する学校教員６名に協力を求め，各教員１名と筆者等による個別ヒアリングを実施した。調査時期は，2012年５月から８月である。

その結果，Ａ中学校の生徒によって詠まれた2011年５月の句からは，本プログラムがＡ校生徒達の心理的成長によりよく貢献したことがうかがえるとの指摘が，すべてのヒアリング協力者から得られた。

２　本研究の対象

本研究では，東日本大震災によって甚大な津波被害を受けた東北地方沿岸部（宮城県牡鹿郡女川町）にある，Ａ中学校の生徒によって詠まれた2011年５月の句を研究対象とする。本プログラムは国語科授業内で行われ，学級が実施の最小単位である。そこで，これまでに報告例

のない学校プログラムについて質的探索を試みる本研究では，最も若年層である第１学年に着目し，２学級あるうちの任意の１学級生徒によって詠まれた句の体系化を試みる。本プログラムでは１人あたり複数の句が詠まれ得るが，宇宙に打ち上げる句として教員に手渡された32名の生徒による45句すべてを研究対象に含めることとした。

３　研究方法

句によって表現された生徒達の言葉を質的に検討するため，ある程度の定性的データを処理し総合的理解を図る技術であるKJ法（川喜田，1967）を，アプローチ方法として用いた。KJ法本部・川喜田研究所の認定コンサルタントからKJ法の特徴的手技について直接指導を受けて，検討を行った。KJ法には複数の作業形式があるが，本研究ではKJ法１ラウンドを用いた。結果の図解化と叙述化にあたっては，臨床心理学的観点から理論的整合性が確保されたと判断されるまで，筆者等２名で繰り返し協議した。さらに，以下に記述する具体的作業を経て，結果の信頼性と妥当性が可能な限り確保されるように配慮した。

（1）　ラベル作り

従来KJ法では，フィールド・ワーク等による取材から集めた素材を基に，ひとつのデータがひとつの中心性と分析テーマに沿った訴えかけ（志）を持つラベルを作成していく。しかし，本研究で素材となる生徒の句は，詠まれた時点ですでにある種の中心性が付与されていると考えられる。そこで本研究では，句をそのまま書き写すことでラベル作成を行った。ラベルには句と後で作業を追認するための通し番号のみを記入し，作者の名や性別等の個人情報について記載しないことで，研究者の主観的バイアスの排除を試みた。

（2）　グループ編成

ラベル拡げ　全45枚のラベルは，一度にすべてのラベルが視野に入るよう，縦５枚・横９枚に並べて机の上に広げた。並べる順序は，IBM SPSS Statistics 20.0を用いて事前に作成した乱数表に従い，無作為化を図った。

ラベル集め　その後，近しい志を持つ，あるいは他のどのラベルとよりも同類の志を持っていると感じ取られるラベル同士を２枚１セットにし，上下に並べた。この際，類似するラベルがないと感じられるラベルは，そのまま残して次の作業に進んだ。

表札作り　本研究では，表札作りに核融合法（川喜田，1996）を用いた。核融合法とは，ラベル集めでセットとした２ラベルの志の核心をシンボリックに書き出し，２つの核心を突き合わせながら，全体感を持ってラベルを捉えられる文章あるいは言葉を作り出していく作業のことである。以下本研究では，核融合法によって生成された表札をカテゴリーラベルとして記述する。

（3）　グループ編成の積み重ね

グループ編成の作業は，もうこれ以上ラベル集めができないと判断されるまで段階的に進められ，本研究では５段のグループ編成が行われた。最終的に，43の句から７カテゴリーと２ラベルが得られた。残りの２句は，いずれも研究者がその句の志を感じ取ることに限界があり，かつ，全体としての論理的整合性を確保できないものとして，本研究の作業からは除外された。作業から除外された２句を含めた全45ラベルと最終的な結果に採用されたカテゴリーラベルの一覧をTable 1に示す。

結果と考察

１　図解化

空間配置　グループ編成によって得られた7カテゴリーと２ラベルに含まれるラベル及びカテゴリーラベルは，模造紙に空間配置された。その際には，全体の論理性がよりよく確保されるように適宜グループの解体と結合が行われ，カテゴリー及びラベル間の関係性は記号によって可視化された。最終的な図解化の結果をFigure 1に示す。

Table 1　カテゴリーラベルと俳句作品の一覧

カテゴリーラベル名				俳句作品
母なる女川	美しい女川町			女川の漁船連なる初ガツオ
				いつだってキラキラ輝く女川町
				今だってきれいな海だ女川湾
				女川の空気は今もかわらない
よき日の女川もう一度				戻したい笑顔集まる女川町
				戻したい笑顔あふれる女川町
				女川町いつかあの頃取り戻す
				平和な日港の町にまたいつか
				復興をいのり続ける子供達
				くやしいなどうして皆がこんなめに
身にしみる日々あるものへのありがたさ	かけがえのない命			ー秒間大切にしようその命
				あの時の悲しみ、苦しみ忘れない
				将来は小さな子供に今を伝える
				こんなときだから深まる友情が
				ありがとう感謝の気持ち大切に
涙をこらえて	逢えないものへの思慕			ぴーちゃんの笑った顔にまた会いたい
				まっててね今、届けるよおばあちゃん
				きっといるペットのカメは海の中
				天国の人たちきっと笑ってる
	僕らが笑おう	僕たちが元気にするんだ女川を		町民を元気にするぞ中学生
				ぼく達が、女川町をとりもどす
				女川は僕たちの手で取りもどそう
		交わし合う笑顔で復興心を町を	まずはみんなで心を興そう	つなげようみんなの心みんなの笑顔
				女川町元気と笑顔で復興へ
				きれいな町みんなの笑顔で取りもどそう
支え合い心をつなげて町づくり	まち全体で女川再興	力をひとつに復興へ		被災地の皆と協力復興へ
				ぼくたちの心は一つ復興だ
				女川町復興にむけてがんばろう
		みなの手で新たな女川よい町に	手を取り造るぞいい町を	未来をね「力」を合わせてつくっていこう
				女川を造っていこういい町に
				もう一度創り直そう海の町
	励ましは日本中から僕らの胸に			支援をね、いっぱいもらい大切に
				全国の希望をのせて復興だ
我らに宿る女川魂	これからも僕らの郷里女川町			取り戻そう海の郷里女川を
				とりもどそう笑顔があふれる女川町
				女川町未来のために、がんばろう
	不屈の根性			震災に負けてたまるか女川町
				失なった町はきっと取り戻す
				津波にね負けない大きな桜の木
未来への歩み出し	ふと気付かれる変化の兆し			海水についたすずらん咲いていた
				少しずつ笑顔が戻るぼくたちに
	私の一歩が未来を創る			明日という未来のために日々進化
				愛すべき未来のために我が道を
研究対象から除外				海を見て思う心は月にいく
				月を見て世界の思い空にいく

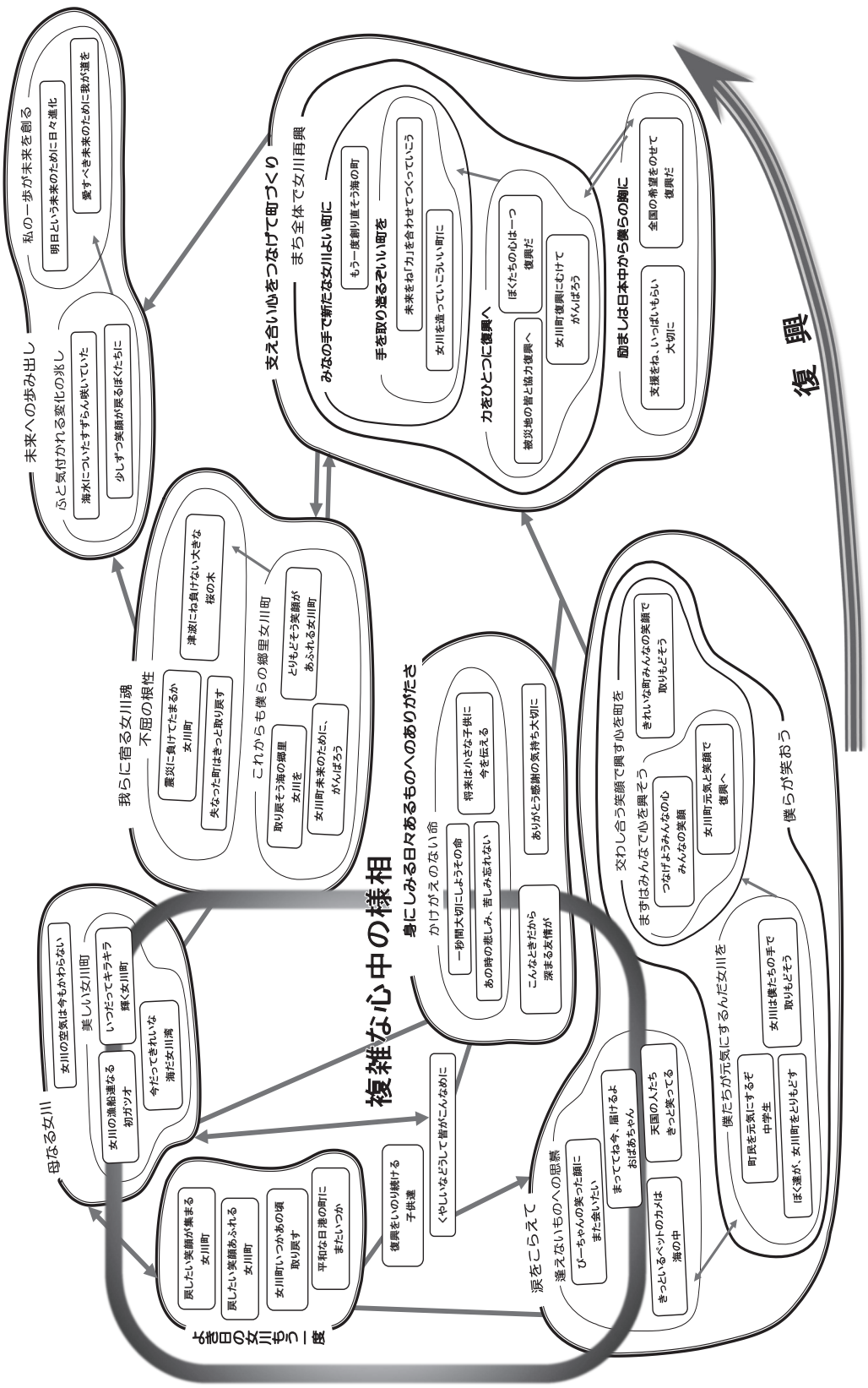

Figure1　2011年５月に詠まれた中１生の俳句の図解化

２　叙述化

KJ法では，図解化された全体構造における関係性の性質を明確にするため，結果を叙述化する。以下，KJ法の手続きの中で作成されたカテゴリーラベルを【　】，生徒の句を『　』で示す。また，女川の風土や2011年５月時点の女川の光景については，予備調査で得られたＡ中学校国語科教員の語りを参考にしている。

Ａ中学校のある女川町では，日本有数の豊かな漁港を中心に街が広がる。1889（明治22）年に成立した女川村がそのまま女川町となって今に続く，伝統深き海の町である。『女川の漁船連なる初ガツオ』をはじめとする豊かな海洋資源を持ち，『いつだってキラキラ輝く女川町』は，そこに暮らす町民にとっての誇りであり，生活を共にする仲間であった。震災後，震災前には賑わいの場所であった女川港一帯は，瓦礫の街へと変貌した。

句作が行われた2011年５月当時，学校のある小高い山腹から海に目をやれば，『今だってきれいな海だ女川湾』と呼べる穏やかな春の海が何事もなかったかのようにそこにあった。新緑に囲まれた校舎にいれば，『女川の空気は今もかわらない』とさえ感じられる。しかし山を下りればすぐに，凄惨とも言うべき津波の爪痕が目に入る。街の至る所で瓦礫が山脈を成し，どこからともなく悪臭が漂う。彼らにとって被災は，逃れようのない眼前の現実である。だからこそ彼らは，心の彼方にある普遍的な憧憬，つまり，【母なる女川】を見つめるのであろう。

『戻したい笑顔集まる女川町』や『戻したい笑顔あふれる女川町』に思いを馳せれば，それは【よき日の女川もう一度】との願いとなり，『女川町いつかあの頃取り戻す』という意志となる。しかし一方で，『平和な日港の町にまたいつか』取り戻される日は，どこか遠い日の出来事にも感じられる。あまりに甚大な被害の様子に祈るより他ない【『復興をいのり続ける子供達』】がいる。津波に対して人間はあまりに無力であった。理不尽に大切なものを奪われたことの悲しみと無念さは，【『くやしいなどうして皆がこんなめに』】という静かな怒りとしても感じられる。

津波が奪っていったのは，日々当たり前に身近にあったものであり，特別なものではなかった。だからこそ，【身にしみる日々あるものへのありがたさ】が抱かれる。津波によって町民の約１割が命を失った女川町では，全ての子ども達が，その家族やごく親しい友人・知人との（永久の）別れを経験した。【かけがえのない命】を『一秒間大切にしようその命』との言葉は真に迫る。『あの時の悲しみ，苦しみ忘れない』ことで，自らの尊きものをいつまでも大切にしたい。そして，『将来は小さな子供に今を伝える』ことで次世代にもそれを継承していきたい。『こんなときだから深まる友情が』，そして，避難生活を送る中での助け合いが，『ありがとう感謝の気持ち大切に』との気づきを教えてくれた。

２ヶ月という期間は，尊くかけがえのないものを喪った現実とその悲しみに向き合うには短い。『ぴーちゃんの笑った顔にまた会いたい』という思い出の回顧やあたかも故人が生きているかのように『まっててね今、届けるよおばあちゃん』と呼びかける姿からは【逢えないものへの思慕】がうかがえる。しかし子ども達は，『きっといるペットのカメは海の中』と自らに言い聞かせ，『天国の人たちきっと笑ってる』と思うことによって，【涙をこらえて】いる。彼らは，それ程の大きな悲しみと喪失を胸に秘め，今を生き抜いている。

住宅の約７割が流失するほどの壊滅状態となった女川町であったが，地震発生時に高台に建つ小・中学校にいた児童・生徒の大多数は，津波の難から逃れることができた。学校も生徒・職員達も，津波によって途方もない物理的・心理的打撃を受けたに違いない。しかし，筆舌に尽くしがたい光景を目の当たりにしながら避難した大人達が体感した恐怖は，ひとしおであった。このような状況にあって子ども達は，大人達に代わって，【僕たちが元気にするんだ女川を】と胸に誓う。『町民を元気にするぞ中学生』と同輩等を励まし，『ぼく達が、女川町をとりもどす』と決意を新たにする。『女川は僕たちの手で取りもどそう』というのである。子どもたちが町を元気付けるためにできることは何だろうか。【まずはみんなで心を興そう】と思い当たる。『つなげようみんなの心みんなの笑顔』とい

う発案の背景には，『女川町元気と笑顔で復興へ』とのスローガンがある。【交わし合う笑顔で興す心を町を】と，笑顔のメッセージを発信し，『きれいな町みんなの笑顔で取りもどそう』と呼びかける。まずは自分が，そして中学生である僕らが笑えれば，それはやがて周囲の大人にも広がり，町全体も元気付けていくだろう。そのために彼らは，【涙をこらえて】，【僕らが笑おう】と自らを励ます。

実際の復興は，当然のことながら，中学生の力だけでは果たし得ない。町民が【力をひとつに復興へ】と結集することで，【まち全体で女川再興】が為し得る。『被災地の皆と協力復興へ』進んでいくために，『ぼくたちの心は一つ復興だ』という想いを町民みんなで重ねたい。『女川町復興にむけてがんばろう』は，町全体の目標となる。次世代の担い手となっていく彼らにとって，復興は必ずしも，過去の再現を意味しない。女川に育った彼らにとって，『未来をね「力」を合わせてつくっていこう』とすることは，『女川を造っていこういい町に』ということを意味する。【手を取り造るぞいい町を】と声をかけ合って，【みなの手で新たな女川よい町に】するのだ。

そして，未来の女川もまた，海と共にある。『もう一度創り直そう海の町』という気持ちに迷いはない。女川の復興は孤独な道程ではない。【励ましは日本中から僕らの胸に】届いている。『支援をね、いっぱいもらい大切に』という感謝が自然に抱かれる。【支え合い心をつなげて町づくり】をして，さらには『全国の希望をのせて復興だ』と奮い立つ。女川町のみならず，日本の未来にまでも希望の光は広がっていく。

【我らに宿る女川魂】は，被災による打撃から立ち上がって行くためのもう一つの原動力となる。子ども達は，“女川”と共に育ってきた。『取り戻そう海の郷里女川を』，『とりもどそう笑顔があふれる女川町』との想いを胸に，『女川町未来のために，がんばろう』と故郷を励ますのは，生まれて数十年のうちに，【これからも僕らの郷里女川町】という愛郷心が確かに培われてきたからであろう。彼らの弛まぬ愛郷心はまた，【不屈の根性】の礎ともなる。『震災に負けてたまるか女川町』と鼓舞し，『失った町はきっと取り戻す』と誓う。そして女川町もまた，子ども達を励まし，勇気づける。目の前には『津波にね負けない大きな桜の木』がある。女川とそこに住まう人々は，同じ魂を持つ同志とも言えるだろう。

子ども達の中に宿る女川魂と心をつなげて支え合いながらの町づくりは，【未来への歩み出し】を励ます。震災から２ヶ月。まだ多くの町民が避難生活を送っており，行方不明者もいる。瓦礫が散乱する町への外出は禁止され，瓦礫をかき分けて造られた一本道を送迎バスで通学する。町も人も，あの日から続く非日常の渦中にいる。だが，『海水についたすずらん咲いていた』ように，月日は着実に歩みを進めている。『少しずつ笑顔が戻るぼくたちに』，【ふと気付かれる変化の兆し】がある。【未来への歩み出し】はもう始まっている。『明日という未来のために日々進化』し，『愛すべき未来のために我が道を』行く。こうした【私の一歩が未来を創る】ことが，今や，実感され始めているのであろう。

総合考察

１　句に見られる中学生達の心理的様相

本研究では，中学１年生，１学級32名の計45句を総合的に捉えるため，KJ法を用いた質的検討を行った。その結果，43の句が論理的総合性をもって体系化され，震災後約２ヶ月時点の子ども達の心理的様相が図解化及び叙述化された。図解化された結果を概観すると，子ども達の複雑な心中の様相と，復興に向かってがんばろうとする姿，そして，“女川”という単語が多用されていることが見て取れる。女川の復興に対する思い入れの強さは，叙述化された結果の中に，さらに明らかである。

象徴的希望としての“復興”　本研究で着目した2011年５月の句が訴えかける主要なテーマに，“復興”がある。しかし当時の女川は，町の再建に向かっていくために不可欠なライフラインの復旧すらままならず，食料の供給も十分には安定していなかった。沿岸部には瓦礫が折り重なっており，地盤沈下によって海と化した地域もあった。ここで，子ども達の句の中で用いられている“復興”が，具体的な町の“再建”ではなく，自分自身そして周囲の大人達への励

まし・鼓舞との意味合いで用いられていることに留意したい。図解化の右下方に見られる復興の気運の中には，暗澹とする地域を励まし，元気付けようとする子ども達の姿が鮮明に見出される。

これまで，がんや事故等によって家族を失った者のグリーフワークにおいては，喪失と喪失の悲しみに向き合うことがその後のメンタルヘルス向上に貢献し，回避・否認は悲嘆の複雑化・長期化を引き起こし得ることが指摘されている（Prigerson & Maciejewski，2008）。しかし，作品に多く見られる自他に対する女川復興への鼓舞を，喪失や悲しみの回避・否認として単純に捉えることはできない。

災害等の危機的な出来事を経験したものにとって第一に必要なケアは，心身の安全感の確保である。喪失を経験する者が災害下等の環境的危機に置かれている場合には，悲しみや喪失に無理に対峙せずに今を生き抜くことが，一種のストレス・コーピングになる（Storoebe et al.，2001　富田他監訳　2007）。我が国では，阪神・淡路大震災から約１ヶ月後の遊び活動の支援において，ほとんどの子ども達が花や動物の親子などの元気が湧いてくる絵を描いたことが報告されている（冨永，2012）。

したがって，震災後約２ヶ月という時期に詠まれた句から得られた本研究の結果を，グリーフワークの観点からのみから捉えることはできない。圧倒的な自然災害に直面し，その甚大な被害の中で互いに励まし支え合いながら“今を生き抜いている”という観点から捉えることが，より実際的かつ本質的理解に近しいと考えられる。生徒達の句に見られる“復興”は，災害状況下の苦難を耐え抜くために不可欠な象徴的希望として理解される（Frankl，1947　霜山訳　1971）。“女川”，つまり“ふるさと”は，人と人とのつながりを感じさせてくれるひとつの心理的拠り所となっていたのであろう。

２　被災地支援としてのプログラム

これまでの多くの災害後の心のケアは，心的外傷体験から１ヶ月以上経過した以後も再体験，回避・麻痺，過覚醒の症状を呈する，心的外傷後ストレス障害（posttraumatic stress disorder：以下，PTSD）の予防を念頭にして行われてきた（井出，2012）。東日本大震災においても，PTSD予防とトラウマからの回復が，メンタルヘルス分野の専門家によって提供されるべき支援として位置づけられている（冨永，2012）。しかし井出（2012）は，子どもへの災害後のメンタルヘルス支援に関する自らの臨床経験から，災害に直接結びつく恐怖や不安の症状は比較的早くに消退することを見出し，PTSDを念頭に置くのではなく，健康な発達を促進するという観点から支援することの重要性を述べている。

ここで，本研究で着目している『俳句・連句作り』のもたらした心理的効果について考察したい。

『俳句・連句作り』は，詠み手が内面に抱く気持ちを，五・七・五の定型のなかに表現する場を与える取り組みと言える。本プログラム実施の際に掲示された女川の写真・絵画は，震災を暗喩するものであった。しかし，句に表現するものについては，“言いたいこと”とのみ教示され，“自らの震災体験”に限定されなかった。震災体験による心理的傷つき以外の心理的機微を表現する余地が十分に残されていたと考えられる。本プログラムは，PTSD予防という治療的戦略ではなく，“自らの抱く想いを言葉で表現する”という本来の国語科情緒教育の側面から導入された。本プログラムでは，授業に参加した全員がひとつ以上の句を詠んでいるが，ここからは，被災体験の想起や感情表出を目的としない，日常的授業を活用することの強みが見出される。俳句がリズム感のある短い表現様式を持つこともまた，子ども達の句作を助けるものであったであろう。

次に，本プログラムの持つ自助的な構造を挙げたい。本プログラムは，被災地にある人的資源や器材を活用して行われた。それに加えて，実際の句作りについても，その自助的要素が見出される。具体的には，Ａ中学校生徒が描いた絵や現場教員の言葉かけ，震災以前の美しい女川の写真を，挙げることができる。子ども達はこのような“女川”や“女川”の仲間達から発信される言語・非言語のメッセージを受け取り，着想を得，句の中にそれぞれの想いを表現

した。Scileppi, Teed, & Torres（2000　植村訳　2005）によれば，自助的な取り組みの持つ，助け助けられるという構造は，互恵性を発揮させる。本プログラムに見られる復興に向けた主体的意欲も，同じ“女川”に生きる共同体メンバーから発せられたメッセージによって受け手となる子ども達がエンパワーされるという，互恵性を発揮し得る構造からの肯定的影響が認められる。

また，被災という一種のリスク要因を成長のためのパワー要因に変えて行く（冨永，2012）際には，“五・七・五”が心理的安全を確保する枠組みとして機能し得る短い定型句であったこと，提出先が宇宙という遥かに開放的な空間であったこと等も貢献したと考えられる。俳句が持つ安全性や保護性，対人間に限らず生きている世界への共感性を育てる特徴は，心の治療ベースとなる（星野，1998）。本プログラムが心のケア活動としても働いていたことが推察されよう。

以上より，(a) 情緒教育という教育的側面から導入されたこと，(b) 互恵性を発揮し得る自助的な構造を持っていたこと，(c) 一定の安全性を確保するものであったことによって本プログラムは，子ども達のすでに持っている健康な力のよりよい発揮と主体的な表現活動を促進するものになったと考えられよう。つまり，Ａ中学校での『俳句・連句作り』は，それが学校プログラムという枠組みで導入されたことで、よりよい心理的効果をもたらすものとなったと考えられる。

また，本プログラムの持つ互恵性から示唆される発展的な応用可能性として，子ども達によって詠まれた自他を鼓舞する句が，取り組みの担い手となった教員，さらには地域コミュニティに暮らす人々をエンパワーすることが挙げられる。実際，子ども達の句に見られる希望や未来に向かう力は，学級通信や新聞に取り上げられて，大人達を力づけている（小野，2012）。中学生達の句は，生徒個人から同級生，同級生から学校コミュニティ，そして地域コミュニティへと拡大され，コミュニティレベルのエンパワメントを具現化するものとしても可能性を秘めていることが示唆される。

３　本研究の成果と今後の課題

本研究では，東日本大震災被災地にあるＡ中学１年生によって詠まれた2011年５月の句の質的検討を試みた。その結果，当時の子ども達の複雑な心中の様相や，心の拠り所として機能し得る“女川”への愛郷心，自他を鼓舞して“復興”という象徴的希望に向かう子ども達の姿が見出された。また，これまで“俳句・連句療法”として精神科デイケア等の治療的枠組みの中で用いられてきた句作りが，災害下におかれた子ども達の健康な心理的発達を促進する学校プログラムとして応用可能であることが示唆された。

今後は同時期の他学年生徒による句の横断的検討や，その後に詠まれた異なる実施時点の句との縦断的検討，他校の生徒達との連句交流に焦点をあてた検討などを行っていきたい。また本研究は，本プログラムの特徴や意義について，句を通して探索的に検討したものに過ぎない。実際に句作りに取り組んだＡ校生徒からの感想や，生徒達の取り組み及びその後の学校生活等の様子に関する教員からの情報を加味した検討を行うことも意義があろう。

このようにして，甚大な被害を受けた子ども達の心理的様相や学校コミュニティ支援のよりよいあり方について理解を深めていくことは，当事者視点に立った被災地支援に意義ある知見を投じるものとなるだろう。その際，『俳句・連句作り』と作文や作詞等の表現活動の違い，“宇宙に向けて句を詠む”という本プログラムの特殊な構造が子ども達の表現活動へ与えた影響についても，探求する価値がある。

今後は以上のような研究によって，心理的効果をもたらし得る本プログラムの特徴とその成果について総合的・多面的に検討し，今後の学校プログラム及び被災地支援への応用可能性について包括的な示唆を得ていくことが不可欠と考える。

【引用文献】

飛鳥井望（2011）．PTSDへのケア　臨床心理学，**11**，536−541.

Frankl, V. E.（1947）. Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager. Wien: Verlag für Jugend and Volk.（霜山徳爾（訳）（1971）夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録―(改版)　みすず書房）

星野恵則（1998）．俳句療法の実際　山中康裕（監修）徳田良仁・飯森眞喜雄・大森健一・中井久夫（著）芸術療法―実践編―　岩崎学術出版社 pp.112−123.

井出浩（2012）．災害と心のケア―精神医学の立場から―　臨床心理学，**11**，563−568.

飯森眞喜雄（1990）．俳句療法の理論と実際　徳田良仁（監修）飯森眞喜雄・浅野欣也（編）俳句・連句療法　創元社　pp.128−205.

伊藤良子・佐藤葉子（2011）．スクールカウンセリングと震災の心理臨床―生徒への支援―　臨床心理学，**11**，558−562.

川喜田二郎（1967）．発想法―創造性開発のために―　中公新書

川喜田二郎（1996）．KJ法―混沌をして語らしめる―　中央公論社

三浦光子（2012）．東日本大震災における支援の体験―包括的心理支援システム構築の原点―　臨床心理学，**12**，171−174.

日本宇宙フォーラム（2011）．座地球人「地球人の交換日記」出版記念〈http://www.jsforum.or.jp/event/education/teraheart/TheChikyuujinn/index.html〉（2012年４月25日）.

小野智美（2012）．女川一中生の句―あの日から―　はとり書店

Scileppi, J. A., Teed, E. L., & Torres, R. D.（2000）. *Community Psychology: A Common Sense Approach to Mental Health*. Person Education.（植村勝彦（訳）（2005）コミュニティ心理学　ミネルヴァ書房）

Prigerson, H. G., & Maciejewski, P. K.（2008）. Greif and acceptance as opposite sides of the same coin: Setting a research agenda to study peaceful acceptance of loss. *The British Journal of Psychiatry*，**193**，435−437.

Storoebe, M., & Schut, H.（2001）. *Meaning Making in the Dual Process Model of Coping with Bereavement*. Neimeyer, R. A. (Ed.) : Meaning Reconstruction and the Experience of Loss. American Psychological Association. pp.55−76.（富田拓郎・菊池安希子（監訳）（2007）．喪失と悲嘆の心理療法―構成主義からみた意味の探求―　金剛出版　pp.68−82.）

冨永良喜（2012）．大災害と子どもの心―どう向き合い支えるか―　岩波書店

宇宙航空研究開発機構（2008）．宇宙連詩　メディアパル

山中勉（2012）．地球人の交換日記（１）―みあげれば　がれきの上に　こいのぼり…―　遊行社

謝辞

本研究は，未曽有の大災害に見舞われたにもかかわらず，力強く学校教育を推進している宮城県牡鹿郡女川町にあるＡ中学校の管理職，教員，生徒の皆さんからいただいた，貴重な経験と価値ある作品をもとに行われたものです。女川町の皆さまに深い敬意と心よりの感謝を申し上げます。また，「地球人の心ぷろじぇくと」を推進している（財）日本宇宙フォーラムの担当者の方々からの多大なご協力に，深く御礼申し上げます。

なお，本研究は，平成24年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽）課題番号24653199の助成を受けて行われました。

――2012. 9. 26 受稿, 2012. 11. 16 受理――

Psychological phases of junior high school students observed through haiku and linked verses composed in a school program 2 months after the Great East Japan Earthquake disaster

—From qualitative investigation with the KJ Method of haiku composed by first grade junior high school students—

Sachiko Kurosawa Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Aki Nishino Mejiro University, Graduate School of Psychology

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

【Abstract】

On March 11, 2011, the Great East Japan Earthquake disaster occurred in the Tohoku district. Various kinds of emergency support sent to the affected areas, where people suffered both physically and psychologically, obtained results to some extent. However, what should be observed over the medium-to-long-term is support that enhances the autonomous reconstruction and restoration of the area. This study focuses on a school program, in which students composed haiku and linked verse, carried out to offer to self-help to the students at "A" Junior High School in a stricken area.

In this report, a systematic analysis with the KJ Method was performed on the works of the first grade students composed in May 2011, about two month after the disaster. The results show complicated psychological conditions in the children as well as their strong desire for restoration and love for their hometown. The term "Reconstruction" is a somewhat symbolic hope that encourages the students. In addition, the analysis indicated that the students' haiku and linked verse composition might be applied to the teachers and adults around them, and even inspire the community where they live.

keywords : The Great East Japan Earthquake disaster, School program, Haiku